

社会的諸価値の放擲を齎す衝動としての愛についての論考

—孤絶の最果てにしるべを求めて—

泉颯人

HS30-0079H

目次

はじめに

第1章 個人の生の実感を阻害する現代社会の
軛について

1-1. 剥奪された自我の実相

1-2. 軛を回避する動機及び帰結

1-3. 浮かび上がる人間に対する疑問

第2章 意識・認識を司る脳から捉える自と他
の関係性

2-1. 自己の感覚意識体験の絶対的な共有不可
可能性

2-2. 認識世界の接触の試みとしての人間の諸
行為・諸活動

2-3. 絶対的存在としての自己と相対的存在と
しての人間

第3章 自己の詮索によって現出する他者と多
様性解釈について

3-1. 人間の非合理性に臨む気宇についての思
索

3-2. 無と無限に関する視座

3-3. ガイア理論とフラクタル的概観

第4章 生の実感としての愛、海容の辺際にお
ける邂逅

4-1. この世界における鞍点としての「考える
こと」

4-2. 思索の初発の動機と苦悩は抵触関係にあ
るか

4-3. 愛の原理と社会の原理の結節点での生存
を目指して

おわりに

引用・参考・関連文献

はじめに

社会の諸問題を問題と認識する自己の価値基準
に問題意識を向け、自己と他者の関係の在り方を
問い直すことで、自らの生を方向づける指針とし
ての価値基準を確立する。

1 個人の生の実感を阻害する現代社会 の軛について

1.1 剥奪された自我の実相

グローバル資本主義や実証主義といった価値
観に立脚した現代文明において、物質や情報、そ
して見えない他者の中に無前提に放たれて生きて
いる我々は、どこか無目的な空漠感や自失感を
味わう。

1.2 軛を回避する動機及び帰結

社会的諸関係によって規定された自己存在に
頼りなさを認めた者は衝動的に社会から逃走する。
非人間的に映る社会の中で人間性を追い求める本
衝動の行き場はすぐさま失われる。

1.3 浮かび上がる人間に対する疑問

人間が目の前の現実に対する対概念として想起
せざるを得ない理想という不思議。本疑問への返
答は、自と他の関係の在り方の根本において、ま
たヒトそのものの根本において為される。

2 意識・認識を司る脳から捉える自と他 の関係性

2.1 自己の感覚意識体験の絶対的な共有不可 可能性

自己と他者の認識世界が触れ得ぬという究極
的な孤独感の源泉には感覚意識体験の問題がある。
人間の意識形成には謎めく部分があり、主体なき
他者の世界と解釈できる。

2.2 認識世界の接触の試みとしての人間の諸

行為・諸活動

人間の諸行為・諸活動の根源的欲動を感覚意識体験の共有の試みと捉えた場合、現在の世界はそうした人間の根源的欲求の果てに形成されたものだと理解できる。

2.3 絶対的存在としての自己と相対的存在としての人間

他者との感覚意識体験の共有を試みた瞬間、自己にとっての主体なき他者の世界は主体を持った他者の世界に変貌する。それは不如意として、また遍く不条理として現前する。

3 自己の詮索によって現出する他者と多様性解釈について

3.1 人間の非合理性に臨む気宇についての思索

不如意としての他者は、例えば脳神経科学で明らかにされつつあるニューロダイバーシティを考慮することで、人類の進化や種の保存の観点からその意義を見出すことが出来る。

3.2 無と無限に関する視座

分子生物学の発展が齎した動的平衡存在としての生命観は、大乘仏教の唯識派が説いた世界観と重なる。人間は絶えることなき分子・原子の入れ替わりの状態として存在している。

3.3 ガイア理論とフラクタル的概観

他との明確な境界を持たぬ自己の在り方はミクロにもマクロにも適応され得る。その時知覚される全体との合一感こそが自他一如としての愛である。

4 生の実感としての愛、海容の辺際における邂逅

4.1 この世界における鞍点としての「考えること」

愛への到達を目指して「考えること」は、一方では精神世界の頂に向かう至高の行為として、他方では何らの社会的諸価値を孕まぬ愚劣な行為としてこの世界に位置づけられている。

4.2 思索の初発の動機と苦悩は抵触関係にあ

るか

生きづらさを契機として芽吹く衝動としての愛は、それが知覚される過程において孤絶感としての苦悩を伴うが、それは「人間を如実に見る」ことによる須要な情動である。

4.3 愛の原理と社会の原理の結節点での生存を目指して

一切の他からの懸隔によって知覚された愛を有した状態で知辺を求めて社会との再融合を果たすことで、我々は究極的に生を実感し、また自我は実現されるのである。

おわりに

人間の真の関係性を思議するための凡ゆる学問の体系的な把握は、同時に人間の普遍性を求める立場をとる。また、そこに社会学の目指されるべき姿があると考ええる。

引用・参考文献(一部抜粋)

- パスカル, ブレーズ, 1990, 『パンセ』 白水社
フロム, エーリッヒ, 2020, 『愛するということ』 紀伊國屋書店
佐伯啓思, 2020, 『近代の虚妄—現代文明論序説—』 東洋経済新報社
渡辺正峰, 2017, 『脳の意識機械の意識—脳神経科学の挑戦—』 中央公論新社
川端裕人, 2020, 『「色のふしぎ」と不思議な社会—2020年代の「色覚」言論』 筑摩書房
福岡伸一, 2007, 『生物と無生物のあいだ』 講談社現代新書
カリーリ, ジム・マクファデン, ジョンジョー, 2015, 『量子力学で生命の謎を解く』 SB クリエイティブ株式会社
高崎直道, 2011, 『大乘仏教とは何か』 春秋社
ブロック, ジェームズ, 2003, 『ガイア—地球は生きている—』 産調出版
トール, エックハルト, 2008, 『ニュー・アース—意識が変わる世界が変わる—』
ニーチェ, フリードリヒ, 2010, 『善悪の彼岸』 岩波文庫